

学校名 鈴鹿市立河曲小学校

学校長名 中野 誉

令和6年度 校内研究実施計画書

1 研究主題及び教科

研究主題	<u>自ら考え、学び続ける子の育成</u> ～ 一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して ～
教科・領域	国語・説明文

2 主題設定の理由

(1) 学校教育目標と児童の実態について

本校では、学校教育目標「自ら学び、ともに社会をつくろうとする子どもの育成」のもと、「自ら学び、協働して課題を解決する子」「違いを認め合い、人の気持ちをわかろうとする子」「健康で安全な生活を心がけ、自ら体を鍛える子」をめざす子ども像とし、日々の教育活動を進めている。

三世代が同居する家庭に育ち、ゆったりとした生活を送っている子や、様々な事情で家庭的に寂しい思いをしながら生活している子、また外国にルーツをもつ子など、生活経験や生活背景の異なる多様な子どもたちが共に学習している。子どもたちは、素直で明るく、与えられた問題に対して真面目にこつこつと努力することができる。また、困っている子には手助けができ、周りのなかまに思いやりの気持ちをもって接することができる子も多い。

令和5年度は、中心教科を算数科として、研究主題を「考えることを楽しみ、学び続ける子の育成～一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して～」とし、研究を進めた。副主題を「一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して」としたことで、子ども同士が自分の考えを伝え合い、学び合える授業づくりをめざした。自力解決の時間を十分に確保したり、ペア学習やグループ学習を取り入れたりしたことで、児童一人ひとりが自分の考えをもてるようになってきた。また、考えを図に表しながら問題を解決したい、いろいろな方法で考えたいという児童の姿が見られるようになってきた。その反面、「考えをもっている、筋道を立てて、自分の言葉でわかりやすく相手に伝えられない」「自分の考えを順序良く表現することができない」「友達の考えと自分の考えを比較しながら聴くことができない」「すぐにあきらめてしまい、粘り強く最後まで取り組むことができない」という児童の弱みが明らかになった。

また、全国学力・学習状況調査やみえスタディ・チェックの結果からも、他者の考えを活用し、図や式、言葉を使って表現するような記述式問題の正答率が低く、説明する力に課題があることがわかった。さらに、個々の児童の学力差が大きいため、授業後半になる程、低学力の児童が授業についていけず、理解を深められない課題も見えてきた。

同時に、次のことが教師の課題として明らかになってきた。

- ・教師の出場として。(子どもたちにどこまで与え、どこまで考えさせるか)。
- ・授業の核心やまとめの部分を教師が教師の言葉でまとめがちである。
- ・基礎基本の徹底を図ろうとすると教師が引っ張る授業に陥りがちである。
- ・タイムマネジメント(全体討議の時間や、ふり返りの時間を十分に取れていない)。
- ・子どもの話し合いが深まらない課題になってしまう。

上記のことを踏まえて、本年度の研究主題を「自ら考え、学び続ける子の育成～一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して～」として、国語科を中心に研修を進めていく。主題の「自ら考え、学び続ける子の育成」は、すぐにあきらめてしまい、粘り強く最後まで取り組むことができないという河曲小学校の児童の課題をもとに設定した。この力は非認知能力の一つ「やりぬく力」として、今後児童に育てていきたい能力としても注目されている。学校教育目標「自ら学び、ともに社会をつくろうとする子どもの育成」のもと、主体的に学びに向かい、粘り強く最後まで続けられる児童の育成に取り組んでいく。また、考えをもっている、筋道を立てて、自分の言葉でわかりやすく相手に伝えられない、自分の考えを順序良く表現することができない、友達の考えと自分の考えを比較しながら聴くことができない、といった児童の「話す・聞く力」の改善に取り組むため、副主題は昨年度と同様に「一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して」と設定する。

今年度は学校全体で同じ統一感のある研修を進めるために、国語科の中から「説明文」に分野を絞って研修を進める。国語科においても系統性をもった授業を進め、国語の授業スタイルを作っていきたい。そのため、説明文における読み取りの型や、要旨や要点をまとめるための手立て、筆者の主張に対する自分の考えの持たせ方などを検討していきたい。その中で、ペア・グループ活動を取り入れ、伝え合い学び合う場を設定することで、協働的な学習を深めていきたい。全体討議でも児童の「わからない」を出発点にそれぞれの考えをつなげたり、自分の考えと相手の考えを比較したりする授業を進めることで児童の考えを深められるようにしたい。

(2) 学習指導要領との関わり

学習指導要領では、子どもたちに育みたい資質・能力が次のように示されている。

「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成」「学びを人生や社会にいかそうとする学びに向かう力、人間性等の涵養」の3点が挙げられている。また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善をおこなうこととし、児童が各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方(以下「見方・考え方」という。)を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えをもちに創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。(学習指導要領 p22)

これらについて、本校が「考えることを楽しみ、学び続ける子の育成」という研究主題のもとで進めてきた、「主体的な学びにつながる授業の導入の工夫や学習課題の設定」、「さまざまな考えを出しあう中で学びを広げ・深める学習活動の追及」などは、学習指導要領の示す事項と方向を同じにするものであると考える。そして、下記(3)において、これまでの研究をもとにして設定した研究主題においても同様であると考える。具体的な実践を通して、本校児童の実態を踏まえた学習指導要領の具現化への方策を吟味・検討していきたい。

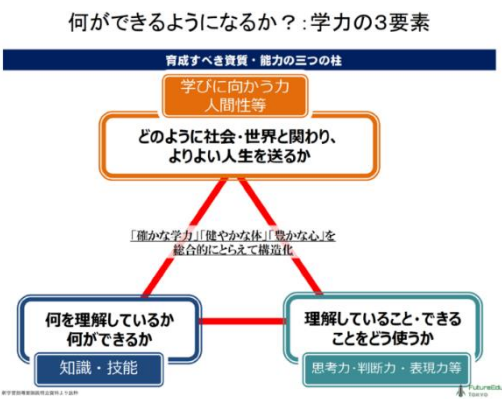
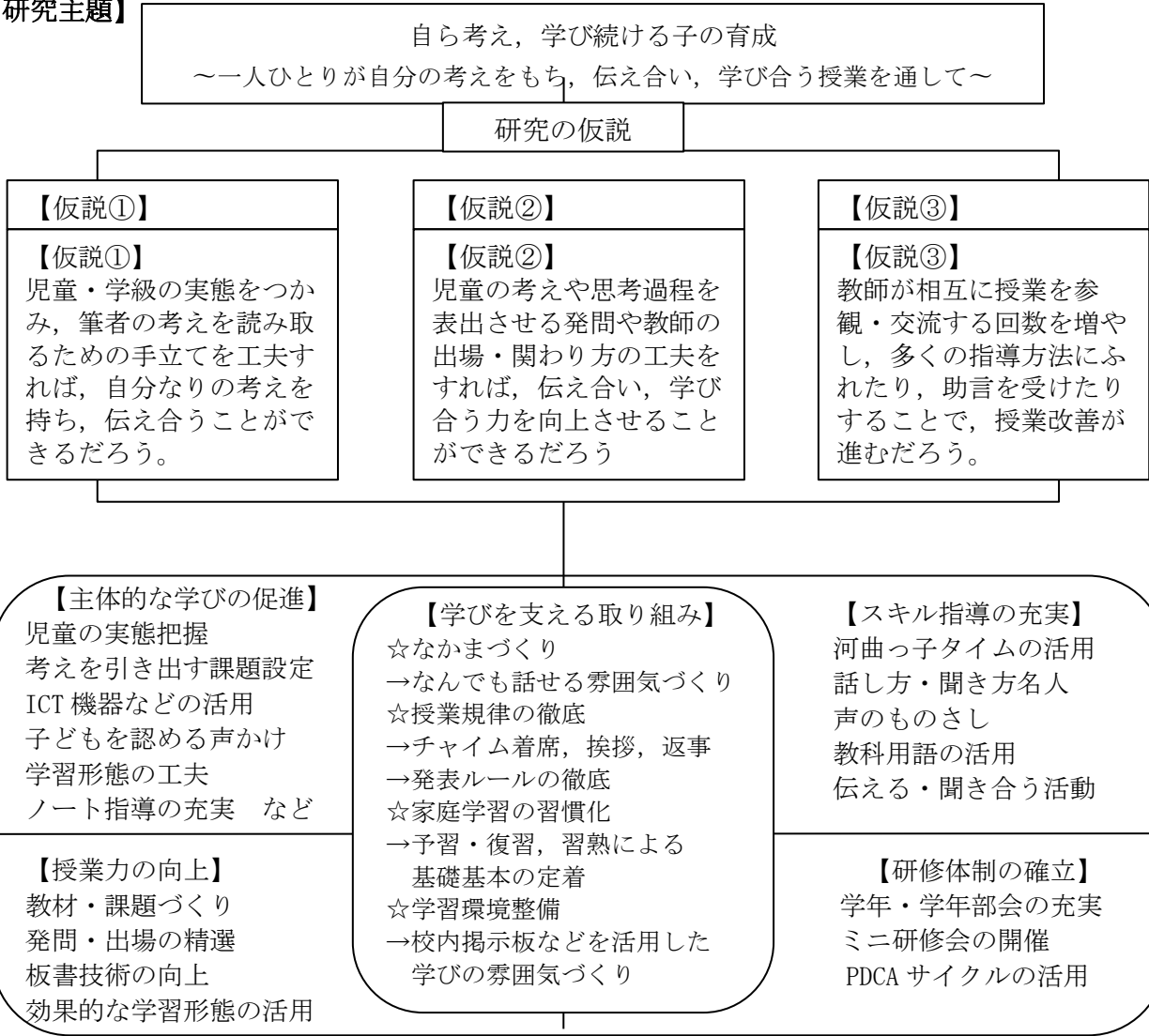
(3) 研究主題について

上記(1)(2)を踏まえ、研究主題を「自ら考え、学び続ける子の育成～一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して～」とする。主題の「自ら考え、学び続ける子の育成」は子どもの主体性や自ら学ぶ姿勢、そして学びを支えるなかまづくり、学習環境の整備と充実について追求することである。

副主題として掲げた、「一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業を通して」は、指導者が授業と子どもを、あるいは子どもと子どもをどうつなぐか、思考力・判断力・表現力をいかに育むかということなどを研究することである。そして、国語科の研究を通して培った「学びに向かう力」を、教科を超えて学習活動全体へと波及することを意識して研究を進めていきたい。

3 研究内容及び方法

【研究主題】



(1) 研究仮説について

仮説① 手立ての工夫

子どもが能動的に考えを持つためには、授業者の手立ての工夫が有効だと考える。文章を読み取るための手立てを工夫することで、その文章が伝えようとしていることを基にしたり、根拠となる情報を抜き出したりしながら自分の考えをもつことができるだろう。また、ペアやグループでの話し合いの場を取り入れることで、自分の困り感を友達に伝えたり、友達の考えを聞いたりするなかで、自分の考えを深められるようにしていきたい。

仮説② 発問や教師の出場・関わり方の工夫（授業と子ども、子どもと子どもをつなぐ授業）

学び合う力をつけるためには、子ども任せの授業や教え込む授業ではなく、子どもとともにつくる授業が有効であると考え。授業の関わりや板書の工夫などを通して、一人ひとりの多様な考え方を意図的に引き出したり、わかりたいという思いを持続させ、粘り強く課題に向きあわせたりする。その中で、友だちの考えを手がかりに自分の考えを見直したり、課題についての見方を変えて考えたりしながら、自分の考えを統合的・発展的に考える力を高めていきたい。

仮説③ 授業の参観・交流・助言

授業改善を進めるためには、個々の取り組み意識を向上させる必要がある。また、チーム河曲として「いつでも」「何でも」相談しあえる学年部づくりを進め、教材研究や児童理解を多角的な視点で行い、授業を参観する回数を増やし、多くの指導方法にふれあい、自らの支援・指導に活かしていきたい。仲間や外部講師からの具体的な助言や指摘を受け止め、自らの指導癖や教師としての姿勢を常に問い直し、互いに高めあえる教師集団づくりを進めながら、子どもたちの学びを確かなものにしていきたい。

(2) 研究主題に迫るために大切にしたいこと

本校における、学び合いの姿を以下のように設定することとする。

子どもたち一人ひとりが、相手の考えを受け入れたり、自分の考えを見直して考えを深めたり、新たな視点で考えて答えや解決への道筋を見出したりするなどの姿。

ペア・グループ活動は、どのような目的で、いつ、どれくらいの時間取り入れるのか、考える必要がある。適した場面で活用することで、有効な働きをするだろう。また、仲間との関わりの中で、お互いの考えを交流させ、聴いて考えて伝え合うことで、考えをつくったり考えが広がったり深まったりして、自分や仲間の進歩を実感できる授業と考える。

2 ICT 機器の活用

クロームブック端末、電子黒板機能付きプロジェクター、実物投影機器等、ICT 機器を活用することで、視覚的に理解を深めさせたり、伝え合い・学び合う場面を活性化したりすることで、児童の主体的な学びを促進し、子どもたち一人一人の個性に合わせた教育の実現をめざしていく。特に、1人1台のクロームブック端末の「ミライシードのオクリンク」等を効果的に活用することで、児童が自らの考えをもつとともに、ペアやグループによる活動を通して、互いの考えを伝え合い、学び合うことができる授業づくりをめざし、協働的な学びにつなげていく。

「ミライシード オクリンク」の長所の1つ目は、ペンツールやテキスト入力等で、児童が容易に繰り返し書いたり、消したりすることができることである。試行錯誤しながら解決方法を見つけることで、児童に思考力、表現力を育ませたい。長所の2つ目は、自分の考え（ワークシート）を指導者や他の児童に、瞬時に送ることができたり、ワークシートを他の児童と共同作業・同時編集することができたりすることである。ペア学習を取り入れ、相談しながら考えの見通しをもたせたり、お互いの考えを説明し合わせたり、自分たちの考えを比較させたりすることで、図を見せ合いながら友達と考えを交流させ、個々の児童の学びを深めていく。特に、自分たちの考えを比較する活動では、それぞれの考えの共通点や相違点について考えさせることで、全体討議（それぞ

れの考え方や式を比較し、検討する活動)につなげ、児童の考えを共有したり、広げたりしていきたい。長所の3つ目は、簡単にワークシートを複製できることである。1つ目の考えをもてた児童には、複製されたワークシートを使って、2つ目、3つ目、・・・と多様な考え方をもちこませる。長所の4つ目は、オクリンクのLIVEモニタリング機能等を使って、指導者は机間指導しなくても、指導者のクロームブックの画面で児童の考えを把握することができることである。児童の困り感や考えのつまずき、考えのつながり等を把握することで、一人一人の児童に合った学習支援ができるようにしていく。このような活用方法は算数科を中心に取り組みを進めてきた。今年度は国語科における効果的な活用方法を模索していきたい。

また昨年度の反省から、「情報モラルやルール徹底をしないと、指導をしてもすり抜けて使う児童が多くいる」という課題がでてきたので、出前授業なども積極的に活用して、指導を徹底させたい。また、「調べ学習でコピー&ペーストしているだけで、文章を理解して、要約することはできていない」という課題も出てきたので、何のために、何を目的としてchromebookを使うのかを明確にして活用することが必要である。

3 教材分析・教材研究の充実

子どもの学びを充実させるためには、まず指導者の確かな教材分析と、子どもの主体性を引き出し、学び合いを生み出す教材研究が重要である。

教材分析では、数学的事象を正確に捉えることが大切である。系統性や子どもたちに身につけさせるべき知識・技能、指導の重点などを整理するほか、その事象がもつ数学的な仕組みやおもしろさなどを指導者が見いだすことが必要である。

データ保管できる教材・教具(ワークシート・オクリンク・フォーム等)を保管する場所を全体で統一したので、それらの教材も活用していきたい。また、すすくの児童は、同じ学年内でも学力差が大きいため、それぞれの教材を準備する必要がある。

4 めあての焦点化

本時の学習の目標やつけたい力を子どもの言葉に置き換え、具体化したものが「めあて」である。ゴールが分かるような「めあて」を子どもと共に作っていくことが理想である。子どもの反応を具体的に予想し、単元を通して、系統性を考え、より深く教材研究をする必要がある。「なぜ」「どうして」等、児童の問いや課題がめあてにつながるような、導入や授業展開にしたい。また、学習内容によっては、子どもたちからめあてを引き出せるとよい。

5 「振り返り」の意義を見直す

昨年度の反省から、授業の時間配分の甘さにより、「振り返り」の時間がとれないこともあった。

「振り返り」は何のために行うのか、指導者自身がもう一度再確認し、意識して授業を行っていく必要がある。振り返りはただ単に行うのではなく、振り返りの視点を設定することで、より効果が期待される。本時のめあてに合わせて振り返りの視点を設定するようにしていく。そして、子どもが自分の学びを客観的にみて「振り返り」を継続的に行うことで自己の成長を感じ意欲が高まるように、さらに次へとつながる意欲になるように、研究を深めていく必要がある。

6 話し方名人・聞き方名人の活用

児童の課題である「筋道を立てて、自分の言葉でわかりやすく相手に伝えられない」、「自分の考えを順序良く表現することができない」、「友達の考えと自分の考えを比較しながら聴くことができない」といった課題を改善するために、今年度も話し方名人・聞き方名人を活用して授業を進める。

聞き手を意識し声の大きさや体の向きを変えて話すことは、低学年から意識づけさせたい。また、中学年以降は、理由からではなく結論から話すように指導をしていく。相手に伝わりやすい話し方の順序を意識させたい。

聞き方においては、必ず反応することを低学年から意識づけさせる。みんなの意見が受け入れられる学級づくりを大切にしていきたい。中学年・高学年では、自分の意見と比べながら聞いたり、相手の意見の要点をおさえることを指導していく。

	話し方名人	聞き方名人
低学年	1. 3のこえで 2. きくひとにからだをむけて 3. さいごまではっきりと	1. しずかに 2. はなすひとのかおをみて 3. はんのうして 4. さいごまで
中学年	1. 聞こえる声で 2. 聞く人に体を向けて 3. 結論を先に 4. 最後まではっきりと	1. よいしせいで 2. 話す人を見て 3. 反応して 4. 自分の考えとくらべて
高学年	1. 聞こえる声で はっきりと 2. 聞く人に体を向けて 3. 結論を先に 4. 友達の考えにつなげて	1. 話す人を見て 2. 反応して 3. 話す人の要点をとらえて 4. 自分の考えと比べて

7 学習形態の工夫

対話的・協働的に学習に取り組めるように、活動させる意図やねらいを明確にして、ペアやグループ等、少人数での学習形態を取り入れる。ペア・グループ学習の中で、伝え合い、学びあう場を設定し、低学力の児童のわからない等の困り感を明らかにし、その困り感を共有することで、協働的な学習につなげていく。ペア学習を取り入れるタイミングや話し合う時間は、児童の実態に合わせて適宜考慮する必要がある。

8 学びをささえる言葉の力の育成（語彙・用語）

子どもたちの表現が、限られた言葉ではなく、多様な語彙を用いたものになるように指導を進める。また、聴き手には言葉や表現を的確に受け取る力を育む必要がある。そのために、日常のコミュニケーション、言語活動をささえる語彙、思考を進めるために必要な用語や方法の指導を進める。あわせて、子どもたちが表現する場を積極的に取り入れ、子どもたちの言葉の力、表現する力を育む。「言葉の宝箱」に記載されている様子を表す言葉など、日記や作文の指導の中で活用していきたい。

9 ノート指導や板書の方法について

ノート指導や板書の方法など、授業づくりの土台を共有し研究を進めていきたい。土台を共有して授業づくりを進めることで、学年や指導者が変わることによる子どもたちへの不安や負担を軽減することが期待できるほか、指導者の立場としても毎年、初期指導をする時間が短縮できる。国語科におけるノート指導として下記のノートを基本とする。

四月十五日(月)	〇〇〇(題名)
単元のめあて	くどう なおこ
④どのように音読するかをかんがえよう。	
「ルウ」は「ノノン」は言う「すてきなにおい」が気になるけれど、おなかもすいていたから、ついていくかどうか、少しまよっていたんだと思う。	
③登場人物のしたことが分かる言葉を見つけることが、大切だと思った。	

題名・単元のめあては、第1時の授業だけ書く。

自分の考えと、その理由が分かるように書く。

また、昨年度は、good note キャンペーンを行ったことで、友達のノートに興味・関心を持っている児童が見られた。教員自身もノート指導をさらに意識するようになったので、今年度も行いたい。

8 学習を継続して取り組む力、粘り強さ

授業の中で思考する時間を確保したり、すぐにあきらめない子を育てたりしたい。教師自身も粘り強く向き合う必要がある。

- 何でもかんでも教師が喋ってしまわない。考える子を育成する。
- そのための授業づくりを考える。
- 自力解決する力を育む。そのための基礎学力の定着。

(3) 研究の方法・計画

1 一人ひとりが自分の考えをもち、伝え合い、学び合う授業についての研究(国語科)

研究授業を中心に進める

○全体研修会 低・中・高学年で(全3回)、事前事後の検討会を全体でもつこととする。

2 研究授業について

- ・国語科を研修の中心教科に据え研修を深めていきたい。(系統的な指導・学力の向上に繋げる授業)
- ・国語5本、人権1本、6本の公開授業
- ・研究授業を行う学年については、代表者が指導案を作成する。相担任は本時案のみを作成し事前公開する。
- ・すくすく学級は生活単元学習か、算数・国語で全体研を行う。
- ・指導主事の先生はできるだけ呼んでいきたい。
- ・2学期に研究授業が偏るので、実施時期をもう少し分散したい。
- ・できれば1学期に1本は授業を公開したい。そこで研修の方向性を示し、全職員で研修の方向性についての共通理解を図る。公開する場合(1学期は行事等で忙しい)は、指導案は略案程度でもOK。

- ・完結するきれいな授業を目指すのではなく、少し冒険がある授業も必要。
- ・できるようになることも大切だが、子どもの思考の過程を授業で見る。
- ・子どもが悩み、考え、もがきながら課題に向き合う姿やそこでの教師の働きかけ等も研修材料となる。
- ・学年の課題（弱み）を考慮して領域を決める。
- ・公開１週間前を目安に、指導案事前説明会を行う。事前説明会では、学年の取り組みなどについての説明を受け、子どもの実態、授業のねらい、子どもたちにつけたい力などについて共通理解を深め、授業の参観に臨むこととする。
- ・提案授業の参観について・・・参観者は児童に声をかけない。
- ・全体研は全員が参観する。部内研は学年部の先生は必ず参観する。先行授業に関しては、任意とする。（学年または学年部でどのように参観するか相談する。）
- ・研究授業当日の役割分担（記録・写真撮影・ビデオ等）は、それぞれの学年・学年部の中で協力して行うこととする。
- ・指導案の形式を統一し、授業展開等共通性をもたせる。（国語科）
- ・事後検討会にはよい点や課題等を付箋に記入して臨む。
- ・事後検討会は必要に応じて話し合いの形態を工夫する。

4 年間研修計画

一 学 期	4月 4日（木）	ミニ研修会①	学級開きについて
	4月 9日（火）	ミニ研修会②	エビペンの仕方について
	4月12日（金）	第1回校内研修会	校内研修で大切にしたいこと・言葉の宝箱について・研究主題の設定と研修の方向性について
	4月12日（金）	ミニ研修会③	個別の指導計画について
	4月24日（水）	第2回校内研修会	授業力の向上について
	5月17日（金）	第3回校内研修会	学調・みえスタの採点 指導案の書き方・研究授業事後検討会について
	6月14日（金）	第4回校内研修会	研究授業6年1組国語「時計の時間と心の時間」
二 学 期	7月23日（火）	第5回校内研修会	学調・みえスタの分析の還流・授業改善について
	9月30日（月）	第6回校内研修	研究授業2年2組国語
	11月 5日（火）	第8回校内研修	研究授業4年2組国語 研究授業国語 研究授業人権
三 学 期	研究授業国語		
	1月22日（水）	第9回校内研修会	各学年の成果と課題、本校児童の強み・弱みの交流
	2月（日は未定）	第10回校内研修会	みえスタディ・チェックの採点
	2月19日（水）	第11回校内研修会	研修のまとめ 来年度へ向けて